**9月4日に園内研修をしました**

　去る9月4日、オンラインでモンテッソーリ教育やコミュニケーション、危機管理について園内研修を行いました。土曜日保育にご協力いただいた皆様ありがとうございました。

研修の１つは、『モンテッソーリ子どもの家』という今年2月に全国公開された映画を見て、子どもの

育ちについてさまざまな視点からディスカッションしました。

映画はフランス最古のモンテッソーリ学校を2年以上にわたり撮影し、子どもの成長や発達過程を

記録した内容です。

その中でモンテッソーリ教育とは “Aid to Life”つまり「いのちが育つお手伝い」とあります。

植物がしっかりと根を張り、発芽し、茎や枝を伸ばし、太陽に向かって花を咲かせる過程で、植物自身が出来ないこと＝支柱を立てたり、草を刈ったりなどを適切な時期に手伝うことと似ているからだ、と

書かれています。

また、モンテッソーリ教育と従来の教育との違いについても改めて学びました。

そもそも「教育」とは何でしょうか？

一般的に考えられているのは、『子どもを空っぽのバケツと仮定し、情報をたくさんバケツに積み込み、

最後にその満杯度をテストで評価すること』が多いかと思います。

しかし、モンテッソーリ教育では子どもを『球根』と見なし、いつ何色に咲くのか、枯れるのかなど

膨大で綿密な成長計画はすべて『球根』の中に宿っていると考えます。

自ら成長する子どもの力を信じ、子どもが育とうとしている力の邪魔をせず、すくすくと伸びていける環境を整えて見守ることが大人の役割としています。

ただし、この考え方は子どもが『自由に何でもしてもいい』ということではなく『規律の中に自由が

ある』ということです。

つまり社会生活を行う上で必要なルールを守ることで、自由な活動が保障されています。

そこで大人がするべきことは、子どもへ身辺自立に関することから遊びや教具の扱い方まで、丁寧に

やり方を伝える＝『提示』をすることです。

自分から「やりたい」と言ってきたことは勿論、興味あることへと導き、やり方を理解して一人で出来るようになったら、見守ります。

モンテッソーリの教具には「誤りの訂正が自分で出来る」ようになっているので、子ども自身がやって

いて「あ、間違えた」と思ったら、それが自分で直せるようなスタイルになっています。

それでも出来ない時は大人が「改めてやり方を伝える」ことをします。

　また、異年齢という多様性の中で、学びの効果がより発揮されます。

大きい子が小さい子に教える、助け合うなども自然に発生します。

学びというのは『見て学ぶ・して学ぶ・教えて学ぶ』ことで本当に身につくからです。

このように、私達大人がモンテッソーリ教育を学ぶことで、子どもの本質を知り、子どもの自立（自律）や自己肯定感を高めることに繋がります。

子どもが考え、悩み、繰り返し取り組む時間をどのように確保していくか、更に子どもに伝わる言葉の

掛け方は何か…など園・クラスがより子ども主体になるための意見交換をしました。

子どもの毎日が今まで以上に充実したものになるように、私達の学びも深めていきます。　(北嶋)